



タイトル GHQ 焚書図書開封 7
戦前の日本人が見抜いた中国の本質

著者 西尾幹二 (にしお かんじ)

出版社 徳間書店

発売日 2012年8月31日

ページ数 358 ページ

本書（本巻）は、長野朗（1888－1975）の特集号だと著者は言う。といっても、「支那の真相」、「民族戦」、「支那 30 年」のわずか三冊で、事実の衝撃性と分析の鮮烈性ゆえにもっぱら後の二書に焦点を絞っている。

どのページも目を奪う驚くような事実指摘に溢れているが、とりわけ第 9 章の「満州事変前の漢民族の満州侵略」は、現代の東アジアの情勢を予言しているように思える。

膨張し拡大する白アリ軍団（支那人）の進出には理屈も何もない。いわば盲目の意志があるのみである。「満州事変はまだ終わっていない。まだまだ続くし、これから違った形で勃発する可能性があるというのが長野氏の予言に違いない」と著者は読みながらしきりに考え、恐怖を覚えたという。

当時の日本人は、支那は独力では近代統一国家にはなれないと見ていた。日本の協力なしでは治安もままならないし、貨幣経済ひとつ思うに任せない。日本人は「上からの目線」で大陸を見ていた。しかし、1911 年から 30 年間この土地を自分の足で歩き、つぶさに現実と接していた長野朗は、一貫して「下からの目線」で日本と支那の関係を見ていて、どうもそうではないと気付いていた節があると著者は言う。

さっそく、目次をみてみよう。

- 第 1 章 シナの国民性あれこれ (1)
- 第 2 章 シナの国民性あれこれ (2)
- 第 3 章 シナ軍閥の徴税・徴兵・略奪
- 第 4 章 シナ政治の裏を描くほんとうの歴史
- 第 5 章 大正年間のシナ —— 民衆の生活様々

第 6 章 今日の反日の原点を見る —— 蒋介石時代の排日
 第 7 章 歴史を動かしたのは「民族」ではないか
 第 8 章 移住と同化 シナ人の侵略の仕方
 第 9 章 満州事変前の漢民族の満州侵略
 第 10 章 いかに満人は消去され、蒙古人は放逐され、朝鮮人は搾取されたか
 第 11 章 支那事変 —— 漢民族が仕掛けてきた民族戦争
 付論 戦後ある翻訳書に加筆された「南京」創作の一証拠 —— 溝口郁夫
 あとがき

著者が「GHQ^{ふんしよ}焚書 図書開封」というシリーズ本にまとめて世に問うているのは、戦後のものの見方を正しいと思っているからでも、アメリカの正体を知りたいからでもない。ましてや、よく誤解されているように、戦前の日本に立ち還りたいからでもない。

敢えて言えば、明治以来の西洋文明に包み込まれ、手足を取られ、台詞を付けられてものを考えたり、書いたりしていることに貴方は疑問を持っていませんか、と歴史研究や人文・社会科学系の学問をしている人々に問い質したいと著者はいう。

・・・又現在の刑罰を見てもかなり^{げんこく}惨酷である。腹を割くとか、云うに忍びない残虐をやることは、済南に於ける邦人の虐殺事件を見ても明らかであるし、・・・

この虐殺事件は、昭和 3 年（1928 年）蒋介石軍率いる国民党軍に日本人居留民が殺された「済南事件」をさしているすさまじい事件だった。

当時の外務省公電には —— 「腹部内臓全部露出せるもの、女の陰部に割木を差し込みたるもの、顔面上部を切り落としたもの、右耳を切り落とされ左頬より右後頭部に貫通突傷あり、全身腐乱し居れるもの各 1、陰茎を切り落としたもの 2・・・」とある。これを今の日本で問題にしないのはおかしいと著者はいう。

こういうことを平気でやるのが支那人である。ヨーロッパ人もそうであるが、やはり、牛豚などの動物を殺して食べるのが一般化している社会の文化なのだろうか。

日本では、田舎に行けばいくほど菜食になる。野菜中心になる。ところが著者のヨーロッパ体験からいうと、ドイツあたりでは田舎に行けばいくほど野菜を食べなくなって、ほとんど肉食になるという。

長野朗の「支那の 30 年」には、女子供が平然とさらし首を見る街中の情景を描いたシーンがある。それにしても、我々には考えられない話ばかりだ。・・・

読み進めると、あまりにも残虐な民族なので、読むのが嫌になってくる。それでも、支那がどういう国であり、支那人がどういう民族なのかを我々は知っておく必要がある。



もう 25 年ほど前に読んだ本で、「呪われた中国人——中国食人史の重大な意味」（黄文雄著 カッパ・ブックス 1990 年）がある。この本では、ほとんどの日本人が知らない中国の姿が明らかに

なる。当時読んでいて気分が悪くなったのを思い出す。

食人とは、人間を食物として食べることをいう。「鄧小平秘録」第 152 回で毛沢東によって強行された大躍進政策（文化大革命）は悉く失敗し、3755 万人の餓死者を出したという。

中国国防大学の元研究員の辛子陵氏の「千秋功罪毛沢東」上下巻には、飢餓の末、子供や死体を食した例などを暴露している。

これからも、「文化大革命」時の食人の話は噂ではなく、真実であることが判る。魯迅の「狂人日記」も、中国の食人風習に関する問題提起だったのだろう。

ところで、日本の敗戦直後に中国側は中国人の死傷者数は 320 万人だと主張した。そしてすぐに 579 万人に上方修正した。中国共産党政府はこれを更に 2168 万人に増やした。この数字さえ、戦後 50 年目にまたも修正された。反日教育を国是と定めた江沢民はロシアでの戦勝国記念式典でいきなり中国人犠牲者は 3500 万人だと大演説した。前記「鄧小平秘録」の 3755 万人より少ないので、70 周年戦勝国記念式典では、さらに上乗せされるだろう。

長野朗の「民族戦」は、アメリカの西へ向かうエネルギーとロシアの東へ向かうエネルギーが支那大陸でぶつかり、地元のしぶとい民族性と混じりあって怒涛のような大きな波が出来た。それに対して日本はどう臨むのか、という構図でまとめられている。

アメリカは資本による間接侵略を行い、ロシアは武力による領土侵略をなし、支那は大量移民によって民族的発展をするというパターンだった。

支那人は戦いに勝っても負けても発展する。支那が戦いに勝った場合には、その土地の壮年男子を本国各地に分散して住ませ、支那の風俗習慣、文化などで同化させる。

そうやって男たちを本国に送りこんでしまうと、敗戦国には女と老人、子供だけしか残っていない。そこで支那人達がドカドカと移り住み、残った女たちと混血して、その国をことごとく支那化してしまう。

この同化というのが曲者で、支那人化してしまうということである。ご存じの通り、チベットや新疆ウイグルで今も現在進行中である。

戦いに負けた時には、あたかも清朝に征服された時のように、入ってきた他民族は多数で同化し、征服国にどんどん移住して行って、満州で起ったように漢人の居住化を図る、すなわち、負けて勝つわけである。

中国人は生きる為であれば、恥も外聞もない。食えなくなったら何でもする。それによって自分の経歴にキズがつくなんて考えない。ルンペンや犯罪者に身を貶めたりしても、とにかく生きる。逆境にあっても、「人生は終わりだ」などと諦めない。また、世間もそれを決して咎めない。これはすごい。人前を気にする日本人にはとても太刀打ちできない。

彼らは、政府を頼まず人を頼りにせず、自力で生きて行こうとする。そこで自治自衛が非常に発達している。彼らの簡単な生活は、世界いたる所で生き抜いていく、薄いセンベイ蒲団と極端な粗食、頑強な体力は生存競争の大きな強みである。・・・

マルチカルチャー（多元文化）社会を標榜し、移民受け入れにとりわけ積極的だったカナダが、いきなり急ブレーキを踏んだ。「中国人の世界乗っ取り計画」（河添恵子著 産経新聞出版 2010）という面白い本が出版されている。面白いので少し見てみよう。

——さる中国人がカナダの移民局に出かけて行って自らの移民に関して相談した。その時係員から「大学の卒業証書を持ってきていますか」と聞かれた。その中国人の答えは？「どこの大学が良いですか。明日までに準備しますから」と言ったという。係官は絶句。

カナダのある有力新聞曰く「カナダに移民申請をしに来る中国人の30%以上は大嘘つきだから、移民局は彼らの「大嘘申請」を振るい落とす作業だけで大変な手間と税金を使っている、と。係官は憤慨が収まらないという。

中国人のこのデタラメさ、このしたたかさ、この生命力。本書にも出て来た内容と何か深い関係があるようだ。しかも、この種のバカバカしい事柄が、いま世界中いたる所で相次いで起こっているという。

最近の中国では、バブル経済の影響で成金になった人たちがいる。賄賂など、税金のかからない不正収入を懐に入れて不動産や株の売買による不労所得で潤っている連中がいる。

そうした中国人が世界中に飛び出している。13億といわれる中国の人口からすれば、ほんの一握りだが、これが本当に迷惑なのである。

近年のリッチな中国人の最終目標は「金持ち」止まりではないという。一流国のパスポートを手に入れて、世界を自由に飛び回ることだという。

「ウソでも百回、百ヶ所で先に言えば本当になる」が中国人の国際世論づくりだと河添氏は言う。すでに在日中国系は80万人になり、この3年で5万人も増えている。有害有毒な蟻をこれ以上増やさず、排除することが日本の国家基本政策でなければならないことを本書は教えてくれている。



正論5月号（2014.5）に関岡英之氏による「隠された中国移民の急増と大量受け入れ計画」において、日本政府が前のめりになっている「外国人労働者受け入れ」計画の全貌と、中国人には他の外国人と異なる傾向（一定住・永住志向など）がグラフと共に詳細に論じられている。それによると、東京都豊島区の池袋周辺が新中国人街と化していること、埼玉県川口市の団地は中国人の入居者が増え、そのため住居環境の悪化に耐えられず、住民が次々と引っ越しているという。彼らはルールを守らず、自分達でかたまり、やりたい放題だという。いずれも、中国人家族の集落になっている事例からも、カナダやオーストラリア、イタリアで起きている変容が、日本にとっても他人事でないことが判る。今や、全国の刑務所は外国人であふれかえり、府中刑務所では囚人の2割が外国人だという。

TPPに加盟し、さらには「東京五輪」、「被災地復興」、「高齢化介護要員」、「人口減」等のキーワードに惑わされ、日本が移民受け入れと舵を切れば、中国人ばかりが日本に雪崩れ込み、身勝手に増殖し、「日本が日本でなくなっていく」ことは目に見えている。

「洗国」（他国を乗っ取る中国のやり方）という恐るべき支那思想がある。相手がしぶと

い農耕民族の場合は、強制的にどこか奥地の方に移動させるという恐ろしいことをやっている。

同じようなことはスターリンもやった。戦後の中国でも毛沢東が盛んにやった。いろんな民族をあっちこっちに移してしまう。朝鮮人が遠く離れたカザフスタンに沢山住んだり、満州民族が支那大陸のあちこちに散らされて、いまやどこにいるかすら分らない状態になっていたりしている。「先国」というのは恐ろしい話である。

支那では、支那人と他民族との闘争は多く数百年を要し、極めて気長に行われている。支那は古来幾多の民族を同化せしめた経験上、1民族を同化するには「8代3期説」なるものがあり、8代を3つ重ねた24代を要し、1代を25年とすれば、600年を要しなければ完全な同化は出来ないとしている。

古来、中国のやり方には恐るべきものがあるということを知っておく必要がある。

いま日本に大勢の中国人が入ってきているということも、これはまったく油断も隙もならない事態だ。現在、すでに80万人の中国人が日本に入ってきているという。これを放置しておく、ネズミ算式で中国人は増えるだろう。それを放置しておいていいのか。とても深刻な問題である。



日本の歴史は、江戸元禄文化繁栄時の人口は4千万人、明治の近代化の後が5千万人、大正ロマン時代が6千万人、そして戦後復興時が8千万人であった。その後高度成長の後バブル不況に1億2千万人に達している。人口が減り始めたのは2005年である。しかも、国立社会保障・人口問題研究所によれば、人口の減少幅は年々拡大。現在1億2千7百万人、2060年には8.7千万人、2110年には4.3千万人（江戸元禄文化繁栄時とほぼ同じ）まで落ち込む。

ここで、政府が辿り着いた結論は「移民の大量受け入れ」だった。内閣府の試算は移民毎年20万人である。大量受け入れに伴う社会の混乱や日本人が負担しなければならなくなるコストといった負の側面についての説明は聞こえてこない。

しかし、いたずらに人口減になったからと言って、稚拙な移民政策に走ると、欧米先進国の多くの失敗例に見るような「極端な格差の増大」、「社会秩序の破壊」、「人種・宗教・文化面での対立を内在しかねない」など、空前絶後の新たな難題を多発しかねない。

中国では、2010年7月から「国防動員法」が施行されている。国家分裂活動あるいはテロや戦争などの有事の際、国防のために国民を総動員するという法律だ。中国国内だけでなく、国外にいる中国人も対象となっているため、万が一、日本と中国の間で紛争が起こった場合、北京政府が命令を発すれば、日本列島にいる中国人はみな武器を取って立ち上がらなければならない定めだ。外国人登録をしている中国人はみな動員対象者である。

そんな彼らが日本国内で祖国防衛のために戦うことになったら……。こんな状態を放っておいていいのかと、心ある日本人ならそう思うはずである。



中国は戦後の 70 年間に、世界に何かよい貢献をしたことがあるだろうか？ 日本は立ち止まらずに常に上昇しており、テクノロジーの先進性で世界を上回っており、高い技術力が特に評価されている。しかし、現在の中国を見てみると、ほとんど自国文明を放擲していると思えない。中国文明は消えてなくなる危険に直面しており、いずれ残るのは中華料理だけになるのではないかと危惧されている。

「中国政府」は、国際法に違反する領土侵略や領土主権の主張、軍事拡張による東南アジア海域の武力威嚇、海洋汚染、空気汚染などを平気で犯して憚らない。いわゆる、ならず者国家である。中国国民は、中国に住みながらいない。空気汚染、水質汚染、食物汚染などで害毒を垂れ流しているからである。

政府は、GDP のみを追求したがゆえにまねいた、高エネルギー消費、低効率、深刻な汚染、低いアウトプットを意味しており、これは環境に対する略奪と回復不可能な破壊に他ならない。

CO₂ 削減でも日本は、米中日という世界の三大経済大国中、群を抜いて成果を出している。世界の排出量比較で、中国 29%、アメリカ 15% に対し、日本はたった 4% である。

また、中国は、安い賃金で世界の製造工場となり、多大の利益を受けて金持ちになったが、毒ミルクや毛髪で醸造した醤油など、有害物質の入った食物や物品を輸出し、今では、各国が中国製品を買わないようになった。さらに、世界の有名ブランド商品の模造品はほとんど中国製である。インターネットのウィルス攻撃も中国発である。

中国人は、権力利用や汚職賄賂などで金持ちになると、すぐに家族を国外に移住させ、汚職、横領した金も自国以外に預金する。中国からの違法入国者が増える、国外逃亡した者、中国関係を利用した密輸入などで各国は迷惑している。

また、諸国に移住してゲッターを作り、諸国の環境や社会道徳を汚染する。いわゆる、民度が低い民族なのである。

習近平国家主席はこの 1 年、安倍総理の外交手腕や支持率の高さに相当イラついていると考えられるが、それよりも過去 20 余年、中国が発してきた「日中友好」の掛け声など、豊かな日本から「資本」と「技術」と「ノウハウ」をとことん盗み取るための手段でしかなかったということを、我々は冷静に総括すべきだろう。

いま、中国は日本にたいし、「軍国主義復活」、「南京事件」、「尖閣は中国領土」などと虚偽の内容を真実らしく仕立てなければならないが、日本側は中国の実態を事実として暴けば、それで十分世論工作が出来るはずである。

中国が目論んでいる野望は、尖閣諸島や沖縄の奪取に留まらず、日本の弱体化であり、水源地や農地を含む領土の更なる買収であり、人民を大量に送り込むこと（先国）であり、果ては属国化(日本自治区)である。

日本はウソつき国家に、ウソつかれ放題だが、安倍政権には果たして、この「中国が目指す最悪のシナリオ」を逃れる「日本独自のシナリオ」を準備しているのだろうか？

2015. 2. 2